情緒経験におよぼすリアクタンスの効果

——漫画評価事態における検討——

東北大学¹ 今 城 周 造²

Effects of psychological reactance on emotional experience :
Evaluations of a cartoon

Shuzo Imajo (*Department of Psychology, Faculty of Arts and Letters, Tohoku University, Kawauchi, Sendai 980*)

In this paper, it was examined whether resistance to persuasion due to reactance could occur in emotional experience. After reading another male subject's (fictitious) message about a cartoon, the subject saw the cartoon in question, and evaluated it. The contents of the message were varied in order to manipulate strength of threat to emotional freedom. The low threat message was simply a statement of personal impression of the cartoon, on the other hand, the high threat message was worded so as to force the subject to experience pleasant emotions. In Experiment I, some sex differences were obtained. Toward the male coercive communicator, female subjects complied strongly, but male subjects rather showed weak resistance. In Experiment II, male subjects were forced to experience pleasant (or unpleasant) emotions. The results of funniness ratings showed that persuasiveness of the messages reduced in the high threat conditions regardless of the positions advocated. Additionally, subjective responses to reactance arousal were obtained in both experiments. These results suggested that reactance theory could also be applied to emotions.

Key words : psychological reactance, emotions, social influence, resistance to persuasion, cartoons.

リアクタンス理論 (Brehm, 1966 ; Brehm & Brehm, 1981) によれば、行動の自由が脅かされた時には、その自由を回復しようとする動機づけの状態、すなわち心理的リアクタンスが喚起される。リアクタンス喚起時には、敵意や自己方向づけ感などが主観的反応として経験され、更に自由回復行動（ブーメラン効果、攻撃など）がみられると仮定される。すなわち、自由の喪失または喪失の恐れに対して、個人はその自由を保護し、回復するよう動機づけられるというのがリアクタンス理論の基本的な仮説である。

リアクタンス理論の中心概念は自由 (freedom) と脅威 (threat) であるが、同理論におけるこれらの用法は特殊であり、若干の説明を要する。

リアクタンス理論では、自由は“自分がある特定の行動をとりうるという信念” (Brehm & Brehm, 1981, p. 35) と定義される。自由喪失の脅威という表現からは、思想や生活上の全面的拘束といった危機的場面が連想されやすいが、Wicklund (1974, p.39) も指摘するように、同理論においては、個人の全面的な自由さが問題とされるのではなく、ある特定の行動の選択の自由、すな

わちある行動の選択肢について個人が自由であるか否かが問題とされる。また自由という概念には含みが多いので、Brehm & Brehm (1981, p.6) はコントロールという概念を自由と等価なものとして用いている。

リアクタンス理論における脅威の定義は、“何らかの出来事によって自由の行使がより困難になったという認知” (Brehm & Brehm, 1981, p.35) であり、社会的影響過程では、“ある特定の仕方で行動するよう自分に圧力がかけられていることの認知” (Brehm, 1968, p.283) という形をとる。このようにリアクタンス理論における脅威とは影響意図の認知であり、そこには、恐怖や罰を与えられたり威嚇されたりするといった有害な作用の含みはない。すなわち Brehm & Brehm (1981, p.246) も指摘するように、承諾させようとする圧力は罰であれ賞であれいずれも自由喪失の脅威となりうる。

以上のようにリアクタンス理論では、行動の自由、自由喪失の脅威、自由の回復という一連の過程を仮説的な動機づけの状態 (リアクタンス) によって説明するが、社会的影響過程で同理論に関係してくるのは、説得への抵抗という現象である。

ある特定の仕方で行動することを求める圧力は、換言すれば承諾の強要であり、承諾しないという自由を脅かすものと考えられる。喚起されたリアクタンスは承諾し

¹ 現所属 岩手県立盛岡短期大学。

² 本論文をまとめるに際して指導いただいた東北大学文学部丸山欣哉教授、大橋英寿助教授に深謝いたします。

ない自由を回復するよう個人を動機づけるが、脅かされた自由はそれを実際に行使してみることによって回復される。すなわち、指示通りには行動しないことによって、承諾しない自由の存続が確認され、自由は回復される。結局、影響意図の認知は、承諾の減少、更にはブーメラン効果をもたらすというのが、社会的影響過程に関するリアクタンス理論の基本的な予測である。

このような予測は、人間行動のさまざまな面において繰り返し支持されてきた。例えば選択事態や援助行動、自己開示、態度変化などについて自由回復行動（脅かされた自由の行使）が生起するということが知られている（Brehm & Sensenig, 1966; Jones, 1970; Archer & Berg, 1978; Worchel & Brehm, 1970）。

リアクタンス理論はこのように広い適用範囲を持つと考えられるが、本研究では、同理論が情緒経験にも適用可能であるかどうかを問題とする。

リアクタンス理論では行動の自由という概念を扱うので、何を行動とみなすかということがまず重要となる。この点について Wicklund (1974, p.2) は、自由な行動には情緒や態度などの感情的状態も含まれること（感情的状態を自分の意のままに変更できると個人が思っている場合）、憐憫や軽蔑などの感情について人々は容易に自由を保有しうることを指摘している。すなわち、感情や情緒もリアクタンス理論が扱う行動であり、従って基本的には、リアクタンス理論は情緒にも適用可能であると考えられる。

先述のように、態度変化についてはリアクタンスによる説得への抵抗が生起することが知られているが、態度変化の実験で通常測定されるのは、態度の感情的成分である。すなわち態度変化の実験から得られた知見は、賛否や好悪といった感情的状態についてはリアクタンス理論が適用されうることを意味するものである。

本研究ではこのような態度的な感情（“好意的-非好意的”）にとどまらず、喜怒哀楽といった情緒の経験内容がリアクタンス喚起によって影響を受けるかどうかを検討する。

情緒を従属変数としてとる場合、測定としては言語的報告、表情、生理的指標などが考えられるが、態度変化についての研究との連続性という観点からみれば、情緒経験の言語的報告（情緒の評価）の検討が第1の課題となる。この場合、単なる賛否や好悪ではなく、情緒の経験内容に即した評価次元について説得への抵抗がみられるかどうかの問題となる。

情緒におけるリアクタンスの効果の検討を目的とした報告は数少ないが、まずリアクタンス理論からも解釈可能なものとしては Leventhal & Mace (1970) の実験 I が挙げられる。被験者には喜劇映画の評価という課題が与えられたが、男子被験者の映画評価は、笑うことを禁

じられた場合よりも、映画を見てできるだけ笑うよう命じられた場合に、より否定的なものとなった。他方、女子被験者は説得の受容という逆の傾向を示した。男子被験者の結果はリアクタンス理論の予測に沿うものとみなしうるが、リアクタンス理論の直接的検証という観点からは不十分な点がみられる。第1に、従属測定としては映画鑑賞時の情緒を何らかの形で測定する必要があるが、用いられた映画評価尺度は、映画への態度を測定したものとなっている。第2に、この実験では笑うのか笑わないのかという唱導方向が操作されているのみで、圧力の大小、すなわち自由喪失の脅威の大小の操作が行われていない。

情緒経験におよぼすリアクタンスの効果を直接検討した報告としては、Imajo (1981, 1982) がある。漫画評価事態を扱ったこれらの実験では、被験者はまず漫画を見、他の被験者の感想文を読んでから、漫画の評価を求められた。“他の被験者の感想文”は実は実験者が用意したものであり、その内容を変えることによって脅威の大小が操作された。脅威小条件では他者の感じ方については中立的な内容、脅威大条件では“他者も面白く感じるはず”と圧力をかける内容であった。脅威大条件では説得への抵抗がみられるものと予測されたが、いずれの実験においても、漫画評価については条件間に差は認められなかった。他方、好意度の減少 (Imajo, 1981)、自己方向づけ感の増大 (Imajo, 1982) という形で、リアクタンス喚起の主観的反応が検出された。すなわち、Imajo (1981, 1982) の実験では、情緒の自由への脅威によってリアクタンスが喚起されることが示唆されたが、説得への抵抗はみられなかった。

これらの知見をふまえて本研究では、情緒経験におよぼすリアクタンスの効果をもっと検討する。

リアクタンス理論の基本的予測を情緒経験に適用すると、どのように感じるべきかを押しつけられることによってその指示の通りには感じなくなるという予測となる。情緒の基本的次元のひとつに“快-不快”があるが、情緒の自由に対する脅威は、一般に、快情緒あるいは不快情緒を経験するよう圧力をかけるという形をとり、この圧力の増大につれて、経験される情緒は唱導方向とは逆のものとなる傾向を示すであろう。例えば漫画評価事態においては、“面白く感じるはず”と快情緒を押しつけられることによって、漫画の評価はより不快の側へ傾く、すなわち面白さ、こっけいさ、可笑しさなどが損なわれるものと考えられる。

実 験 I

先述のように Imajo (1981, 1982) の実験では、情緒経験においてもリアクタンスが喚起されることが示唆されたが、説得への抵抗は検出されなかった。そこで実

験 I では、手続きを一部変更してこの点の再検討を試みる。その際、Leventhal & Mace (1970) でみられた性差についても併せて検討する。彼等の結果によれば、脅威の増大につれて、男性被験者では説得への抵抗、女性被験者では受容の傾向が予測される。

方 法

被験者 大学生男女各 30 名。

手続き 実験計画は、自由への脅威(脅威小, 脅威大)×性別(男性, 女性)の 2 要因配置で、被験者は、他者の感想文を読んだ後、漫画を見、その評価を求められた。感想文と漫画の呈示順序は、Imajo (1981, 1982) とは逆となっている。他者の感想文の内容を変えることにより脅威の大小の操作を行ったが、この感想文は、他の被験者(以下“A君”)にあらかじめ同じ漫画を見せ、書いてもらったものとされた。なお Heilman & Toffler (1976) の印象操縦説を考慮に入れ、被験者の感想を A 君に見せること、実験終了後に A 君と会って更に意見交換をしてもらうこと、A 君は被験者とは面識のない男子学生であることが教示された。実験者は、実験の開始を告げ、被験者が他者の感想文を読み始めるのを確認すると退室した。

自由への脅威の操作 A 君の感想文は 4 段落から成り、第 2 および第 4 段落において情緒の自由に対する脅威の大小の操作が行われた。

脅威小条件では: “しかし、ユーモアのセンスは人によって違うだろうから、他の人がどう感じるかはわからない。つまらないと感じる人もいるかもしれない。” “ともあれ個人的には面白い漫画だった。他の人はどう感じるのかな?”

脅威大条件では: “これをつまらないと感じる人はいないんじゃない? まずたいいていの人には面白いはず。間違いなし!” “ともあれ、面白い漫画であることは明白。他の人も面白いと感じるはずだ!”

情緒喚起刺激 Imajo (1981, 1982) の実験で用いられたものと同じ 4 こまの漫画。この漫画は予備調査の結果から、ほとんど例外なく快(“面白い”)の側に評価されるが、尺度端の反応は少ないという基準で選ばれた ($M=+1.20$, $SD=0.98$)。

従属測定 主要な測定は、漫画の情緒的評価(“つまらない-面白い”, “こっけいでない-こっけいな”, “笑えない-笑える”)であるが、Leventhal & Mace (1970) では映画への態度を従属測定にしている。笑いには直接対応しないより認知的な項目(“下手な-うまい”, “失敗作-成功作”, “低俗な-高級な”)も用意した。

リアクタンス喚起の主観的反応としては、A 君への好意度、自己方向づけ感、攻撃意図を尋ねた。Worchel & Andreoli (1974) によれば、リアクタンス喚起の結果として、自由を脅かした人(threatener)への好意度が減

少することが予想され、また Brehm (1966, p.9) によれば、リアクタンス喚起時には自己方向づけ感が増大するものと考えられる(自分は自分のしたいようにすることができ、自分の行動を方向づけるのはほかならぬ自分自身なのだという経験内容)。他方、自由の直接的回復には、自由を脅かした人を攻撃して自由への脅威を撤回させるという方法もあるが(Brehm, 1972, p.55)、攻撃行動が遂行されるかどうかは別問題として、リアクタンス喚起時には攻撃意図が増大することも考えられる。

また、脅威操作の吟味のために影響意図の認知、他の説明可能性を排除するために面白さの予期についての質問も用意した。

以上の評定は、すべて -3 から +3 までの 7 点尺度上(“やや”, “かなり”, “非常に”)で行われた。

結果と考察

脅威操作の吟味 影響意図の認知(“A 君は、彼自身の感じ方を私にも押しつけようとした”)については脅威大条件で増大がみられ、脅威の主効果は有意であった($F=36.08$, $df=1/56$, $p<.01$)。従って、自由に対する脅威の操作は有効であったと考えられる。また女性被験者は、男性被験者よりも影響意図を小さく認知する傾向を示した($F=3.12$, $df=1/56$, $.05<p<.10$)。

漫画の評価 全体的傾向として、脅威の増大につれて男性の漫画評価はより否定的となり、女性では逆により肯定的となっている(Table 1)。このうち、面白さ(humorousness)、可笑しさ(laughableness)、成功度(successfulness)、高級さ(superiority)の評価については、脅威×性別の有意な交互作用が認められた(順に $F=9.08$, $df=1/56$, $p<.01$; $F=6.89$, $df=1/56$, $p<.05$; $F=6.36$, $df=1/56$, $p<.05$; $F=7.89$, $df=1/56$, $p<.01$)。また、うまさ(skillfulness)評価でも同様の傾向がみられた($F=3.68$, $df=1/56$, $.05<p<.10$)。このように漫画評価の性差結果は、Leventhal & Mace (1970) から予想される通りのパターンとなった。特に、女性における説得効果は顕著である。単純効果をみると、有意な交互作用が得られた評価項目において、脅威が大きいほど女性は説得をより受容している(順に $F=5.93$, $df=1/56$, $p<.05$; $F=7.36$, $df=1/56$, $p<.01$; $F=3.18$, $df=1/56$, $.05<p<.10$; $F=10.10$, $df=1/56$, $p<.01$)。他方、男性は、面白さ、うまさ、成功度の評価において、説得に対して抵抗する傾向を示した(順に $F=3.34$, $df=1/56$, $.05<p<.10$; $F=2.88$, $df=1/56$, $.05<p<.10$; $F=3.18$, $df=1/56$, $.05<p<.10$)。

リアクタンス喚起の主観的反応 Table 2 に示されるように、脅威大条件では A 君への好意度(“感じの悪い-感じの良い”)が有意に減少し($F=6.50$, $df=1/56$, $p<.05$)、また自己方向づけ感(“どのように感じるべき

Table 1
Mean ratings of the cartoon (Experiment I)

	Males				Females			
	Low threat		High threat		Low threat		High threat	
Humorousness	2.07†	(0.57)††	1.47	(1.20)	1.13	(0.96)	1.93	(0.57)
Funniness	1.53	(0.88)	1.27	(1.00)	0.47	(1.31)	1.07	(1.34)
Laughableness	1.53	(1.20)	1.07	(1.48)	0.73	(1.39)	2.00	(0.73)
Skillfulness	1.80	(0.98)	1.13	(0.88)	0.80	(0.91)	1.20	(1.33)
Successfulness	1.87	(0.72)	1.20	(0.98)	0.93	(1.12)	1.60	(1.08)
Superiority	0.73	(0.93)	0.47	(0.88)	-0.13	(0.62)	0.93	(1.06)

† Each rating was answered by circling an X on a 7-point scale (from -3 to +3).

†† Values in parentheses indicate standard deviations.

Table 2
Subjective responses to reactance arousal (Experiment I)

	Males				Females			
	Low threat		High threat		Low threat		High threat	
Likability of the threatener	0.73	(1.00)	0.27	(0.85)	1.47	(0.50)	0.73	(1.06)
Self-direction†	-1.33	(1.35)	0.20	(1.80)	-2.00	(0.52)	-1.00	(1.72)
Intent to attack the threatener††	-1.93	(1.34)	-0.67	(1.78)	-2.00	(1.15)	-2.13	(1.31)

† "It seems that he ordered me to feel in a specific way, so I am displeased."

†† "Do you want to make a protest against him?"

かを指図されたようで不愉快だ")は有意に増大している ($F=10.89$, $df=1/56$, $p<.01$). 攻撃意図 ("A君に何か抗議したいことがありますか") については性別の主効果と交互作用がみられたが (それぞれ $F=4.11$, $df=1/56$, $p<.05$; $F=3.43$, $df=1/56$, $.05<p<.10$), この結果は、攻撃意図の増大が男性でのみみられたことを示す (単純効果: $F=5.61$, $df=1/56$, $p<.05$). なお、男性ではリアクタンス喚起の主観的反応がより強いという性別の主効果は、好意度と自己方向づけ感についても認められた ($F=6.50$, $df=1/56$, $p<.05$; $F=5.91$, $df=1/56$, $p<.05$).

この性別の主効果と、女性の漫画評価において説得効果がみられたことは、女性におけるリアクタンス喚起が男性に比べて小さかったことを意味するものである。

この性差は、脅かされた自由が持つ重要性の違いによるものと考えられる。Brehm (1966, p.4) によれば、自由の重要性は、その自由が欲求充足のために持つ独自の道具的価値の高さによって規定され、また脅かされる自由が重要であるほどリアクタンス喚起は大となる。本実験における説得への抵抗は同年輩の男子学生A君の主張を拒否するという形をとるが、男性中心的な性別役割期待によれば、女子学生がA君に同調しないという行動は低く価値づけられるであろう。この場合には、脅かさ

れた自由が女性被験者にとっては相対的に重要性の低いものであったことになり、その分だけリアクタンス喚起も小さくなったものと考えられる。

実験Iの結果で注目されるのは、女性被験者が予測通り同調行動をとりながらも内面ではリアクタンス喚起の徴候を示したことで、男性被験者が有意ではないが説得に抵抗する傾向をみせたことである。また漫画評価の結果は、少なくとも説得的コミュニケーションの送り手が男性である場合には、女性はリアクタンスによる説得への抵抗を示さないことを示唆するものである。これらの結果は、Leventhal & Mace (1970) が児童について見出した性差を、大学生を被験者として確認したものと言えよう。

実 験 II

実験Iでは性差についての予測は支持されたが、リアクタンスによる説得への抵抗は有意水準に達しなかった。そこで実験IIでは、男性のみを被験者としてこの点を再検討する (送り手が男性の場合、説得が高圧的であっても女性は同調行動をとることが実験Iで示されたため)。その際、唱導方向の要因についても併せて検討を行う。唱導方向については、態度変化の実験から、自由の先行行使の効果 (Worchel & Brehm, 1970; Snyder

Table 3
Mean ratings of the cartoon (Experiment II)

	Positive pressure				Negative pressure			
	Low threat		High threat		Low threat		High threat	
Humorousness	1.75	(0.92)	1.50	(1.38)	1.30	(1.42)	1.62	(1.11)
Funniness	1.63	(1.07)	1.14	(1.53)	0.87	(1.43)	1.42	(1.15)
Laughableness	1.21	(1.41)	1.07	(1.44)	1.00	(1.41)	1.23	(1.28)
Skillfulness	1.29	(1.37)	0.71	(1.56)	0.53	(1.34)	0.88	(1.05)
Successfulness	1.29	(1.21)	1.04	(1.48)	0.40	(1.28)	0.77	(1.19)
Superiority	-0.21	(1.12)	0.07	(1.16)	-0.47	(1.18)	-0.27	(0.94)

& Wicklund, 1976), すなわちリアクタンスによるブーメラン効果は自分の立場への攻撃に対しては生起しないということが知られている。換言すれば、リアクタンスによる説得への抵抗は説得前の立場が唱導方向と合致する場合にのみ生起することになるが、このような現象は、情緒経験においても同様にみられるかもしれない。しかし本実験では、Leventhal & Mace (1970) の手続きにならい、呈示順序が ① 説得的コミュニケーション ② 情緒喚起刺激の順になっているため、説得前の立場(情緒)は手続き上存在しない。従って、先行行使効果を考慮する必要はなく、リアクタンスによる説得への抵抗は、唱導方向にかかわらず生起しうるものと予測される。

方 法

被験者 男子大学生 108 名。

手続き 実験計画は、自由への脅威(脅威小, 脅威大)×唱導方向(肯定的圧力, 否定的圧力)の2要因配置で、講義時間中に集団実施した。質問紙の構成は、教示, 他者の感想文, 4コマの漫画, 漫画評価, 関連質問という順序。他者の感想文の内容を変えることにより脅威の大小と唱導方向の操作を行ったが、この感想文は、被験者と同じクラスのA君に書いてもらったものとされた。なお印象操縦説を考慮し、漫画評価の結果は集計してA君に見せる旨教示された。

唱導方向の操作 肯定的圧力条件の説得的コミュニケーションは、実験Iと共通。否定的圧力条件では、唱導される立場が“つまらない(不快)”となるよう該当箇所を変更した。

従属尺度 実験Iと共通。

結果と考察

脅威操作の吟味 影響意図認知の結果は脅威大条件での増大を示し、脅威の主効果は有意であった($F=25.05$, $df=1/104$, $p<.01$)。また否定的圧力条件では、影響意図認知がより大となった($F=5.06$, $df=1/104$, $p<.05$)。この唱導方向の主効果は予想外であったが、脅威の主効果が有意であったことから、自由に対する脅威の

操作は有効であったと考えられる。

漫画の評価 全体的傾向として、肯定的圧力条件では脅威の増大につれて漫画評価はより否定的となり、否定的圧力条件では脅威の増大につれて漫画評価はより肯定的となっている(Table 3)。このうち、こっけいさ(funniness)評価については、脅威×唱導方向の有意な交互作用が認められた($F=3.98$, $df=1/104$, $p<.05$)。脅威小条件に注目すると、肯定的圧力条件においてこっけいさ評価はより大であり、社会的影響の効果が認められるが(単純効果: $F=4.25$, $df=1/104$, $p<.05$)、脅威大条件ではこの差はみられなくなり、更に否定的圧力条件においてこっけい感がより大となる逆の傾向すらみられる。すなわち“他者の感想文”の説得力は、脅威大条件において減少している。このような交互作用は、有意水準には達しなかったが、うまさ評価についてもみられた($F=3.09$, $df=1/104$, $.05<p<.10$)。

また、見方を変えて、説得への抵抗が大きいほど数値が小さくなるよう評定値の符号を変換すると(否定的圧力条件で符号を反転)、こっけいさ評価では脅威の主効果が有意となり、脅威の増大に伴う説得力の減少が、より直接的な形で示される。

リアクタンス喚起の主観的反応 Table 4 に示されるように、脅威大条件では、A君への好意度が有意に減少し($F=5.24$, $df=1/104$, $p<.05$)、また自己方向づけ感と攻撃意図は有意に増大した(それぞれ $F=13.35$, $df=1/104$, $p<.01$; $F=4.63$, $df=1/104$, $p<.05$)。これらの脅威の主効果は、リアクタンスが喚起されたことを示すものである。

また唱導方向の主効果もすべて有意であり(順に $F=36.46$, $df=1/104$, $p<.01$; $F=7.15$, $df=1/104$, $p<.01$; $F=4.32$, $df=1/104$, $p<.05$)、否定的圧力条件ではリアクタンス喚起がより大となった。これは、脅かされた自由の重要性の違いによるものと考えられる。娯楽場面における欲求充足という観点から見ると、不快情緒を経験する自由は、楽しむ欲求の充足とは無縁であるため、重要性が低いと考えられる。従って、不快情緒を経

Table 4
Subjective responses to reactance arousal (Experiment II)

	Positive pressure				Negative pressure			
	Low threat		High threat		Low threat		High threat	
Likability of the threatener	0.83	(0.85)	0.32	(1.14)	-0.40	(0.80)	-0.77	(1.09)
Self-direction	-1.00	(1.44)	-0.04	(1.55)	-0.33	(1.74)	0.92	(1.38)
Intent to attack the threatener	-1.29	(1.57)	-0.64	(1.78)	-0.67	(1.68)	0.08	(1.52)

験する自由が脅かされた肯定的圧力条件では、自由の重要性が低い分だけリアクタンス喚起も小さくなったものと考えられる。

実験Ⅱの結果で注目されるのは、漫画の情緒的評価において説得への抵抗が認められたことであるが、この抵抗を説明するための考え方としては、リアクタンス理論以外にも期待はずれの効果と認知的均衡理論によるものが挙げられる。

まず、脅威大条件では面白さ（つまらなさ）の強力な予告によって期待がより高まり、その分だけ漫画の面白さ（つまらなさ）が過小評価されるという可能性が考えられたが、面白さの予想については、漫画評価の結果に対応するような脅威×唱導方向の交互作用はみられず（ $F < 1$ ）、期待はずれによる説明は有力とは認めがたい。

また、脅威大条件では説得的コミュニケーションの送り手に対する好意度が減少していることから、認知的均衡理論による説明可能性も検討する必要がある。すなわち、感じの悪い人と立場が同じであることは認知的に不均衡であり、この不均衡を解消するためには、感じの悪い人とは立場を異にする必要がある。従って、A君への非好意度と説得への抵抗は正の相関を示すと考えられるが、各セル毎に相関係数 r を算出したところ有意な相関は認められず、認知的均衡理論による説明も有力なものとは考えにくい。

従って、リアクタンス喚起の主観的反応の結果も考慮に入れば、実験Ⅱでみられた説得への抵抗は、リアクタンスによるものとみなしうる。

全体的考察

本研究の主要な結果は、リアクタンス喚起の主観的反応が検出されたこと（実験Ⅰ・Ⅱ）、情緒的評価において説得への抵抗が認められたこと（実験Ⅱ）である。また、男性の高圧的な説得に対して女性が表面的には同調傾向を示したこと（実験Ⅰ）、先行行使効果を考慮する必要がある場合には唱導方向にかかわらずリアクタンスによる説得への抵抗がみられたこと（実験Ⅱ）なども注目される結果と言えよう。

リアクタンス喚起の主観的反応の結果は、情緒経験においてもその自由が脅かされた場合にはリアクタンスが

喚起されうること示すものであり、先の Imajo (1981, 1982) の結果を支持する。更に実験Ⅱで、情緒的評価においてリアクタンスによる説得への抵抗がみられたことは、リアクタンス喚起が情緒経験に影響を与えうること示唆し、情緒経験においても自由回復行動が生じうる可能性を示すものである。

このように本研究の結果は、リアクタンス理論の予測に沿うものであるが、なお問題点としては次の2点を考察する必要がある。

第1に、脅威操作の吟味において予想外の主効果がみられた点。すなわち、女性の被験者と肯定的圧力条件の被験者は、説得的コミュニケーションの送り手の影響意図をより小さく認知する傾向を示したことである。影響意図の認知が小さかったこれらの条件ではリアクタンス喚起も小となり、この対応関係はリアクタンス理論に適合するものであるが、女性と肯定的圧力条件において影響意図がより小さく認知されるということ自体は、同理論からは予測されない。このような脅威操作における差異の原因は不明であるが、これらの条件はいずれも脅かされる自由の重要性が相対的に低いと考えられる条件であり、従って自由の重要性と影響意図の認知との間には、重要性の高い自由への脅威は過大視され、低い自由では過小視されるといった機構があるのかもしれない。

第2に、有意ではないが、認知的評価においても説得への抵抗がみられた点。これは、情緒的自由への脅威によって態度における説得への抵抗がみられた Leventhal & Mace (1970) の結果と類似するが、厳密に言えば、本実験では“快-不快”という情緒の自由が脅かされたのであるから、リアクタンス理論から予測されるのは、情緒的評価における説得への抵抗のみである。このような認知的評価の結果は、情緒的自由への脅威が、より認知的・客観的な評価の自由に対しても脅威としての含みを持つことを示唆するものかもしれない。

以上の点については今後の検討が更に必要と思われるが、結論的に言って、本研究の結果は、情緒経験へのリアクタンス理論の適用可能性を支持するものと考えてよいであろう。

ただし、一般化に際しては留意すべき点がある。

第1に、従属測度の問題。本実験で用いた情緒的評価

という従属測定は、情緒経験を何らかの形で反映しているものと思われるが、表情（笑い）や更には生理的指標においてリアクタンスの効果が検出されれば、リアクタンス理論が情緒にも適用されうることのより強力な証拠となろう。Leventhal & Mace (1970) の実験では表情（笑い）については承諾行動がとられ、説得への抵抗はみられなかったが、表情のコントロールは比較的容易であることから、表情においてリアクタンスの効果がみられる可能性は充分にあると思われる。他方、Brehm & Brehm (1981, p.77) はリアクタンス喚起が生理的効果を持ちうることを示唆しており、生理的指標においてリアクタンスの効果が認められる可能性も否定できないものと思われる。

第2に、本研究で取り上げた漫画評価を、情緒経験の適切な代表とみなしうるかという問題。本研究では、笑いを扱った Leventhal & Mace (1970) の実験とのつながりを考慮し、また実験的に作り出しやすい情緒であることから、漫画を見る際のこっけい感を取り上げたが、漫画評価事態においては、それほど強い情緒が喚起されるとは考えにくい。情緒への適用可能性を問題とする以上、不安や怒りといったより強い情緒におよぼすリアクタンスの効果を検討する必要がある。また、情緒の種類によっては、リアクタンス喚起の前提条件である自由の期待度や重要性に違いがあるということも考えられるので、他のさまざまな情緒におけるリアクタンスの効果の検討が更に必要と思われる。

日常生活においても、“泣くな”“怖がるな”といった形での情緒に関する他者からの働きかけはしばしばみられる。Imajo (1981, 1982) や本研究の結果から、経験されるべき情緒の押しつけによってもリアクタンスが喚起されうことは明らかとなったが、情緒的評価における説得への抵抗は必ずしも顕著な傾向とは言えず、情緒経験がリアクタンス喚起によってどの程度まで変容されるか、すなわち情緒経験に対するリアクタンス理論の適用限界については、今後の慎重な検討をまたねばならない。

引 用 文 献

- Archer, R. L., & Berg, J. H. 1978 Disclosure reciprocity and its limits: A reactance analysis. *Journal of Experimental Social Psychology*, 14, 527-540.
- Brehm, J. W. 1966 *A theory of psychological reactance*. New York: Academic Press.
- Brehm, J. W. 1968 Attitude change from threat to attitudinal freedom. In A. G. Greenwald, T. C. Brock, & T. M. Ostrom (Eds.), *Psychological foundations of attitudes*. New York: Academic Press. Pp. 277-296.
- Brehm, J. W. 1972 Responses to loss of freedom: A theory of psychological reactance. In J. W. Thibaut, J. T. Spence, & R. C. Carson (Eds.), *Contemporary topics in social psychology*. Morristown, N. J.: General Learning Press. Pp. 53-78.
- Brehm, J. W., & Sensenig, J. 1966 Social influence as a function of attempted and implied usurpation of choice. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 703-707.
- Brehm, S. S., & Brehm, J. W. 1981 *Psychological reactance: A theory of freedom and control*. New York: Academic Press.
- Heilman, M. E., & Toffler, B. L. 1976 Reacting to reactance: An interpersonal interpretation of the need for freedom. *Journal of Experimental Social Psychology*, 12, 519-529.
- Imajo, S. 1981 Freedom and reactance in feeling states. *Tohoku Psychologica Folia*, 40, 84-98.
- Imajo, S. 1982 Effects of reactance and impression management on evaluation of a cartoon. *Tohoku Psychologica Folia*, 41, 7-15.
- Jones, R. A. 1970 Volunteering to help: The effects of choice, dependence, and anticipated dependence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 14, 121-149.
- Leventhal, H., & Mace, W. 1970 The effect of laughter on evaluation of a slapstick movie. *Journal of Personality*, 38, 16-30.
- Snyder, M. L., & Wicklund, R. A. 1976 Prior exercise of freedom and reactance. *Journal of Experimental Social Psychology*, 12, 120-130.
- Wicklund, R. A. 1974 *Freedom and reactance*. Potomac, MD: Lawrence Erlbaum Associates.
- Worchel, S., & Andreoli, V. A. 1974 Attribution of causality as a means of restoring behavioral freedom. *Journal of Personality and Social Psychology*, 29, 237-245.
- Worchel, S., & Brehm, J. W. 1970 Effects of threats to attitudinal freedom as a function of agreement with the communicator. *Journal of Personality and Social Psychology*, 14, 18-22.